

## 第7回黒島小中学校検討委員会議事録

- 1 日 時 平成29年6月13日（火曜） 19：00～20：30
- 2 場 所 黒島小・中学校 校長室
- 3 参加者 牧野・大村・鶴崎・松崎・山内・惣田・高田・木下・山崎・戸田  
計10名（欠席：濱田・田代・古里） ※敬称略

### 4 協議事項

#### (1) 校章募集について

- 校章は1つに統一する。現小・中学校の校章を参考にする。
- 6月14日（水）～30日（金）までに別紙を児童生徒に配付して募集を図る。
- 7月に開催するあり方検討委員会において協議する。
- 最後は大人の手で修正を図る。
- 先日黒島教会で行われたジャズピアノコンサートと一緒に来られていた竹原由樹子さんというプロのデザイナーの方と出会うことがあった。前向きに考えている。報酬額等については話をしていない。また、黒島中学校の非常勤講師の美術の川崎先生、技術の村田先生に依頼することも可能。
- ちなみに、浅子小中学校の校章は以前からひとつということ。

#### (2) 愛称名について

- 愛称名を決めてもいいのではないかと、要望書提出式の際に市教委から話があった。
- 愛称名と正式名称の使い分けについて知りたい。実際に愛称名を使ったこと・正式名称と使い分けたことがないので、わからない。
- 野母崎小学校・野母崎中学校は小中一貫校として青潮学園という愛称がある。ここは黒島小中学校と同じように、小中学生が同じ敷地で学ぶ小中併設校。一環工になるときに、地域からの要望があつて愛称名を決めたということ。
- 卒業証書や学校が取り交わす正式な文書・公文書については正式名称を使用しないとイケない。しかし、それ以外、例えば、学校が使用する封筒や、児童生徒の体操服やジャージに入れる学校名などは愛称名でもよい。
- 愛称名はアピールしなければ定着はしない。様々な場で使用することと継続することが大切。学校の坂道のところにのぼりを掲示するとか、チラシを配付するなどの周知が必要。
- 子どもたちが将来履歴書等を書くときは、愛称名ではなく正式名称で記入する必要がある。
- 市内の学校では、体操服には校章を入れずに校名をローマ字で入れている学校が多い。

- ジャージや体操服を着て公的な場には出るが、愛称名を入れることでかまわない。
- 駅伝のユニフォームを今年度新調する予定。その際には「Kuroshima」のようにローマ字で入れようと考えている。
- 愛称名を作るなら作るで、正式名称とどう使い分けるか、どう活用するかが課題である。
- もし愛称名なら「黒島はまゆう学園」ではなく、シンプルに「はまゆう学園」がいいのではないか。
- 町民投票の結果「黒島小中学校」となったのに、愛称名をこの委員会で選んでいろいろな場で使ったら、「なぜ一番得票数が多かった黒島小中学校をもっと使わないのか」となるのではないか。
- 校名募集の際に、はまゆうという花のいわれを知らせておけば結果が変わったかもしれない。それほど、はまゆうという花の黒島における意味合いはとても大切である。
- 中体会の時に正式名称で呼ばれるとなると「黒島小中学校」と呼ばれ、小学生はいないのにいるように思われて違和感がある。小学校も同様。小学校体育大会の中で、学校が全体の中で紹介されるとき、「黒島小中学校」と紹介されると、中学生がいると誤解され違和感がある。このようなことを考えると、愛称名があった方がいい。

### (3) 特認校制度・現小中学校の跡地利用について

- 地域おこし協力隊員の三原さんが現黒島小学校の跡地利用について計画をしている。
- 以前この協議の中で出てきた「特認校制度（校区外からの児童生徒を特別の手続き無く受け入れ、児童生徒数が確保できる制度）」と混同された面があったが、本委員会の協議では「本委員会が検討するのは本来の趣旨とは異なる。跡地利用については、三原さんが学校関係者・保護者・地域の方を含めた本会のような会を立ち上げ、協議するもの。」と結論付けた。
- 特認校になるためには、相浦から黒島までのチャーター船と港から学校までの移動の車という移動の問題が課題である。
- 時化・事故のことを考えると、チャーター船は現実的ではない。
- 黒島町内にも市営住宅が設営されれば住民の数も確保できてよいと考える。
- 島留学という制度があるが、親が同居でなくていいのか→だめである。
- 学校が門を開いて子どもを受け入れる準備を先にしておくか、それとも子どもが来るようになってから考え始めるか。
- 以前の協議でも確認したが、子どもの住所が黒島にあれば、学校は全ての子どもを受け入れる。
- 土曜・日曜にある行事なら親も来るのではないか。
- やはり子どもには黒島小中学校に来てほしい。児童生徒数が増えるのは何よりよい。
- 役員の問題が出てくるが、それは育友会の問題なので、切り離して考えていく。
- 役員の問題より子どもの数が少ないのが一番の問題。
- 小中学生が親元を離れて黒島に住むことを考えると、その体制作り（市営住宅等）が

非常に重要。

- 島留学を受け入れるとなると、学校がアピールすることではなく、地域がアピールすること。
- 黒木小学校は格安の住宅を提供して、保護者も一緒に住んでいる児童もいる。育友会の会長は外部の人がなっているらしい。黒木小学校に児童生徒と教職員及び保護者で視察に行つて、生の保護者の声を聞きたい。
- 地域の人たちが寂しいので子どもが来ることは本当にありがたい。黒木小学校のように送り迎えにも親が関わってくれるとよい。黒島のように離島ではハンデが大きい。地域の人を受け入れるとよい。
- 育友会行事であれば、土曜日曜にあるので、親も来るのではないか。フェリーの時間に合わせる。育友会の会長が輪番になったのは、なり手がいない。役員関係の問題もある。
- 役員の問題があるが、子どもが増えてくれることが何よりありがたい。教室がにぎやかになる方がいい。
- 親子が着てくれるのが一番。子どものみが来ることに関しては、子どもが増えることはありがたい。しかし、親が来ないことへの不安が大きい。
- 子どもが減ると、教職員の数も減る。教職員の数が減ると、様々な行事ができなくなつてします。だからこそ、子供が増えることを最優先に考えて方がいい。
- 高校生の離島留学ならあるが、小中学生なら、受け入れ態勢がしっかりとしておかなければならない。
- やると決めてからどうしても時間がかかる。
- 離島というハンディキャップは大きい。黒木小学校は離島部ではない上に住宅などの補助もあるというよさがあるにもかかわらず、児童数が激増しているわけではない。ただ、首の皮一枚つながりながら、児童生徒数が各学年に数名いるという中で推移している。
- 保護者の皆さんと必ず会える時間の設定。子どもたちの様子を直接見る時間を設定したい。黒木小学校は小学校のみ。中学校段階ではない。
- 今の中学1年生・2年生が小学校5・6年生の頃に、三原さんは黒木小学校と一緒にいる。
- 自治協議会の事務も受け持っている。
- 委員の皆さんがよいということであれば、直接三原さんにこの委員会に来てもらつて説明してもらつてということがあつてよい。あり方を考える上での情報提供として説明してもらつて。

#### (4) そのほか

- 門柱は昭和38年総合落成式があつたときに、濱田寅一さんが寄贈されたということがある。この門柱についてどうするか、考えてほしいと校舎建築業者から相談された。
- 一つ目は別の場所に移す。二つ目は今の門柱を削つて再利用する。廃棄ということとは

絶対がない。新校舎での門柱や門扉はどうなるのか、教育委員会とは確認できていない。工事費に加工する予算は入れているのだろうか。→おそらく入っていない。こちらから要望すべきこと。伝えなければ教育委員会の予定通りに進んでいく。

- 門柱は二つある。片方に正式名称、片方に愛称名をそれぞれ彫るという方法もある。厚い門柱なので、今文字が彫ってある分を薄く削って新たに彫るという方法もある。
- 他の「愛」の碑などはどうなるのか。移設は考えていない。いろいろなものを全て移設するとなると、新しい学校がいっぱいになっている。体育館にある卒業制作なども。ここが更地になるのであれば全て移設することなども考えられるが、跡地利用される。卒業生もここに来れば見ることができる。
- ここにある様々な写真（歴代校長・地域の写真・校舎の写真）は残さないといけないだろう。

以 上